田舎教師

田山花袋著
新潮社 1988（新潮文庫）

文学部教授　上原　秀明

この数年関心を持っている作家に田山花袋がいる。明治42年に書かれたこの本は、主人公が妙に影の薄い作品と評されている（福田恆存）。しかし、関東平野中央部に位置する地方の風土がみごとに浮き彫りにされていることも確かである。日本経済史や人文地理学の分野でも近代農村の地域的事情を知る格好の資料として高い評価を受けている。

平面描写という文学理論にのっとり、自然から社会・人文環境を構成する景観諸要素を、風景画風に淡々と描写している。花袋はこの作品の中で、利根・渡良瀬合流域の風土を愛情を持って眺めている。読者もこのありふれた田舎町の風物や生活に愛着を感じとることになるだろう。

著者は、島崎藤村、徳田秋声、エミール・ゾラなどとともに近代の自然主義作家の範疇に位置づけられている。彼らのとった理論は、対象を主観を交えず、より客観的に描写する形式で、きわめて科学的な態度を一面でとっており、人文地理学を専攻する者として、大いに魅力を持たせてくれるのである（小説という形態では主人公の展開に物足りなさを持たせることになるのだか）。

地表の諸事象の羅列的な配列で終わっている無味乾燥な描写の地誌図式に比して、この作品は、そうした地誌的描写にストーリー性をもたせ、すぐれて動態地誌的な表現となっており、十分楽しむこともできる（中田遊廓往還の描写など）。かれがすぐれた民間地理学者として位置づけられるのも納得するところである。

諸君には明治初期の地形図を傍らにおいて、読むことをお勧めする（作品そのものにも舞台となっている地域の地図が添付されている）。身近なありふれた風景の中に、風土性にもとづく埋もれた地域資源を再発見することになるかもしれない。風土に裏打ちされた地域創生のヒントにありつくことにもなろう。元来、地誌編纂の意図は、実際の行政に役立てることを基本としていたのであるから。